

やつきぶん はちぼく た おわ  
八月分の八木一石給ひ候ひ了んぬ。

即身成仏と申す法門は、諸大乘経並びに大日経等の経文に分明に候ぞ。爾らばとて彼の経々の人々の即身成仏と申すは、二つの増上慢に墮ちて必ず無間地獄へ入り候なり。記の九に云はく「然るに二つの上慢深淺無きにあらず、如と謂ふは乃ち大無慙の人と成る」等云云。諸大乘経の煩惱即菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門は、いみじくをぞたかきやうなれども、此はあえて即身成仏の法門にはあらず。其の心は二乗と申す者は鹿苑にして見思を断じて、いまだ塵沙・無明をば断ぜざる者が、我は已に煩惱を尽くしたり。無余に入つて灰身滅智の者となれり。灰身なれば即身にあらず。滅智なれば成仏の義なし。されば凡夫は煩惱・業もあり、苦果の依身も失ふ事なれば、煩惱・業を種として報身・応身ともなりなん。苦果あれば生死即涅槃とて法身如来ともなりなんと、二乗をこそ弾呵せさせ給ひしか。さればとて煩惱・業・苦が三身の種とはなり候はず。今法華経にして、有余・無余の二乗が無き煩惱・業・苦をとり出だして即身成仏と説き給ふ時、二乗の即身成仏するのみならず凡夫も即身成仏するなり。此の法門をだにも、くはしく案じほどかせ給わば、華嚴・真言等の人々の即身成仏と申し候は、依経に文は候へども、其の義はあへてなき事なり。僻事の起こり此なり。弘法・慈覚・智証等は此の法門に迷惑せる人なりとみ候。何に況んや其の已下の古徳・先徳等は言ふにたらず。但し、天台の第四十六の座主東陽の忠尋と申す人こそ、此の法門はすこしあやぶまれて候事は候へ。然れども天台の座主慈覚の末をうくる人なれば、いつわりをろかにて、さてはてぬるか。其上日本国に生を受くる人は、いかでか心にはをもうとも、言に出だし候べき。しかれども釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙楽・伝教大師は、即身成仏は法華経に限るとをぼしめされて候ぞ。我が弟子等は此の事ををもひ出にせさせ給へ。

妙法蓮華経の五字の中に、諸論師・諸人師の釈まちまちに候へども、皆諸経の見を出でず。但し、竜樹菩薩の大論と申す論に「譬へば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し」と申す釈こそ、此の一字を心へさせ給ひたりけるかと思へ候へ。毒と申すは苦集の二諦、生死の因果は毒の中の毒にて候ぞかし。此の毒を生死即涅槃・煩惱即菩提となし候を、妙の極とは申しけるなり。良薬と申すは毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候ひけり。此の竜樹菩薩は大論と申す文の一百の巻に、華嚴・般若等は妙にあらず、法華経こそ妙にて候へと申す釈なり。此の大論は竜樹菩薩の論、羅什三蔵と申す人の漢土へわたして候なり。天台大師は此の法門を御らむあて、南北をばせめさせ給ひて候ぞ。而るを漢土の唐の中、日本の弘仁已後の人々の誤りの出来し候ひける事は、唐の第九の代宗皇帝の御宇、不空三蔵と申す人の天竺より渡して候論あり、菩提心論と申す。此の論は竜樹の論となづけて候。此の論に云はく「唯真言法の中にのみ即身成仏する故に是三摩地の法を説く。諸教の中に於て闕きて書せず」と申す文あり。此の釈にばかされ

て、弘法・慈覚・智証等の法門はさんざんの事にては候なり。但し大論は竜樹の論たる事は自他あらそう事なし。菩提心論は竜樹の論、不空の論と申すあらそい有り。此はいかにも候へ、さてをき候ひぬ。但し不審なる事は、大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし。文と申し、道理きわまれり。菩提心論が竜樹の論とは申すとも、大論にそむいて真言の即身成仏を立つる上、唯の一字は強しと見へて候。何れの經文に依って唯の一字をば置いて法華經をば破し候ひけるぞ。証文尋ぬべし。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云はく「經に依らざる法門をば黒論」と云云。自語相違あるべからず。大論の一百に云はく「而も法華等の阿羅漢の授決作仏、乃至譬へば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云。此の釈こそ即身成仏の道理はかゝれて候へ。

但し、菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて候が、水火の異なりをばいかんがせんと見候に、此は竜樹の異説にはあらず、訳者の所為なり。羅什は舌やけず、不空は舌やけぬ。妄語はやけ、実語はやけぬ事顕然なり。月支より漢土へ經論わたす人、一百七十六人なり。其の中に羅什一人計りこそ教主釈尊の經文に私の言入れぬ人にては候へ。一百七十五人中、羅什より先後一百六十四人は羅什の智をもって知り候べし。羅什来たらせ給ひて前後一百六十四人が誤りも顯はれ、新訳の十一人が誤りも顯はれ、又少ざかしくなりて候も羅什の故なり。此私の義にはあらず。感通伝に云はく「絶後光前」と云云。光前と申すは後漢より後秦までの訳者。絶後と申すは羅什已後、善無畏・金剛智・不空等も羅什の智をうけて、すこしこざかしく候なり。感通伝に云はく「已下の諸人並びに皆俊なり」云云。されば此の菩提心論の唯の文字は、設ひ竜樹の論なりとも不空の私の言なり。何に況んや次ぎ下に「諸教の中に於て闕きて書せず」とかゝれて候。存外のあやまりなり。

即身成仏の手本たる法華經をば指しをいて、あとかたもなき真言に即身成仏を立て、剩へ唯の一字ををかるゝ条、天下第一の僻見なり。此偏に修羅根性の法門なり。天台智者大師の文句の九に、寿量品の心を釈して云はく「仏三世に於て等しく三身有り。諸教の中に於て之を秘して傳へず」とかゝれて候。此こそ即身成仏の明文にては候へ。不空三蔵此の釈を消さんが為に事を竜樹に依せて「唯真言法の中にのみ即身成仏する故に是の三摩地の法を説く。諸經の中に於て闕きて書せず」とかゝれて候なり。されば此の論の次ぎ下に、即身成仏をかゝれて候が、あへて即身成仏にはあらず。生身得忍に似て候。此の人は即身成仏はめづらしき法門とはきかれて候へども、即身成仏の義はあへてうかゞわぬ人々なり。いかにも候へば二乗成仏・久遠実成を説き給ふ經にあるべき事なり。天台大師の「於諸經中秘之不傳」の釈は千旦千旦。恐々。

外典三千余巻は、政道の相違せるに依って代は濁ると明かし、内典五千・七千余巻は、仏法の僻見に依って代濁るべしとあかされて候。今の代は外典にも相違し、内典にも違背せるかのゆへに、二つの大科一国に起こりて、已に亡国とならむとし候か。不便不便。

七月二日

日蓮花押

大田殿女房御返事